

## 会長メッセージ

# 「でんきの月」制定にあたって



松瀬 貢規  
明治大学教授

フランクリンによる雷の研究など、先人達がさまざまな電気現象を見出し、電気工学・電子工学という学問ならびに技術体系を築き上げてきた約300年弱は、人類の長い歴史からみるとほんのわずかな期間です。

この間に生み出された発電機、トランジスタ、コンピュータなど、多くの電気・電子技術が私たちの日常生活を支え街を明るくしました。アメリカでの調査によると、20世紀の大きな技術成果の第3位は飛行機、第2位が自動車、そして第1位が「社会の電化」となっています。

内燃機関による自動車が電気でも動くようになると、電気が利用される割合は更に高くなってゆきます。また、電気エネルギーに関わる技術は、情報・通信ネットワーク技術と融合した新たな発展が期待されています。このように私たちの生活と社会環境は、電気・電子技術とますます密着したものとなっています。

一方、化石燃料のエネルギー資源により大きく発展した20世紀には、地球温暖化や環境破壊といった問題も生まれました。今日、地球に存在するエネルギー資源が有限であるという認識が深まり、人類と地球が持続的に発展可能な循環型社会、低炭素社会が必要であるといわれています。循環型システムの根幹は太陽エネルギーですが、私たちはそれを電気エネルギーに変換して利用します。つまり、循環型社会システムは、電気・電子技術を見無視しては成り立ち得ないと言えるでしょう。このためにも、我々は電気・電子技術の未知の分野への更なる挑戦を続けていく必要があります。

現在、私たちは携帯電話、インターネット、停電しない電気など「最先端の電気・電子技術の成果」に取り囲まれているにも関わらず、その仕組みを考えることもなく日々当たり前のように利用しています。鉱石ラジオを作り電気への夢を膨らませた感動を今の子供たちから見るとは難しくなっています。この理由の一つは、多くの技術がブラックボックスの中に閉じ込められ、その仕組みを考える余地が無くなってしまったためであると思われます。

人類が高度な文明を築いたのは、道具を使うようになり、その原理と使い方を多くの人々が理解し、たえず改良と工夫を重ねてきたからにほかなりません。しかし、高度な電気・電子技術が生み出した道具は、構造が複雑に

なり、その中身を理解できるのは、残念ながら一部の専門家だけとなってしまいました。そして、多くの道具の自動化が進み、頭を使わなくても簡単に利用できるようになると、その仕組みまで考える人は、ますます少なくなってしまいます。また、それらが世の中に広く行きわたり、あたかも当然のことのようになってしまうと、それを生み出した技術に対する驚きや賞賛など、感動することもなくなってきてしまいます。

そこで、人々の役に立つものを数多く世の中に送り出し、生活を豊かにしてきた電気・電子技術に対して、今「新しい付き合い方」が必要ではないかと思ひ至りました。高度な技術により生み出される便利で新しい道具を使いこなすためには、新しい考え方や使い方を身につけなければなりません。

すなわち、産業革命から始まって人類は新しい道具をたくさん作り出し、使ってきましたが、その中で、今日の電気・電子技術のように急速に進歩する道具に対しては、今までにはなかった対応が必要になってきています。そのために、「でんきの新しい付き合い方」を考える月とし、多くの人たちに電気・電子技術をあらためて見つめ直そうというきっかけにさせていただくことを望んで「でんきの月」を制定しました。

現在、電気学会が中心となって、電気に関わる企業、教育機関、さまざまな団体や組織が、それぞれの役割に沿ったキャンペーン活動を展開する準備を進めています。この活動を通じて、我が国の電気・電子技術の学術と産業における成果や実績を多くの人に理解していただき、特に若い世代へ、その魅力と夢、おもしろさと無限の可能性を伝えることにより、彼らが挑戦する意欲を掻き立ててくれることを期待しています。

「でんきの月」は毎年3月と設定しました。これは、1878年にわが国で初めてアーク灯が灯された日を記念して定められた電気記念日が3月25日であることを核とし、同時に、年度末の節目にあたる3月に次年度への希望とともに考えを新たにするを願ったためです。

具体的な活動は、「でんきの月」連絡協議会を通じて各方面に協力を呼びかけ、連携をとりながらさまざまな形で取り組みます。

以上の趣旨をご理解下さり、ご協力のほどをどうぞよろしくお願い申し上げます。

\*「でんきの月」の詳細は、185ページの「学会だより」をご覧ください。